中学生の部　最優秀賞

小泉八雲と怪談

焼津市立港中学校　三年

進士阿美

祇園精舎の鐘の声、
諸行無常の響きあり。
婆羅双樹の花の色、
盛者必衰のことわりをあらわす。

これは、平家の栄華と没落を描いた『平家物語』の冒頭部分です。私は、中学校の国語の授業でこの平家物語を覚えました。

怪談話として有名な小泉八雲の「耳なし芳一」に登場する盲目の琵琶法師、芳一が奏でていたという物語は、まさにこの平家物語でした。

「耳なし芳一」で亡霊となり、芳一にとりついていたのは、平家の侍たちでした。亡霊たちは、芳一の弾き語る琵琶に感

動し、特に壇ノ浦の戦いのくだりでは、涙を流して聞き入っていたそうです。壇ノ浦で悲惨な死を遂げた彼らは、その琵琶を聞きながら一族の最期を嘆いていたのでしょう。その場面を想像すると、亡霊たちの悲しみが、ひしひしと伝わってきます。

小泉八雲の怪談は、ただ単に「怖い」というだけではなく、読者に様々な感情を抱かせることができると思います。

他の怪談話「雪女」でも、妖怪の悲しさが描かれています。

雪女の存在をうっかり明かしてしまった巳之吉を、雪女は殺すことができなかったのです。私は、人間と妖怪が恋に落ちることを不思議に感じましたが、雪女の優しさに感動しました。妖怪には人間を驚かしたり、苦しめたりするというイ

メージがあります。しかし、この雪女のように、人間と仲良くなりたい妖怪もいるのではないでしょうか。巳之吉が口を滑らせなければ、雪女は幸せに暮らせたのではないかと思うと、私には雪女がかわいそうに感じられます。

「雪女」に似た話は、日本の各地にあるようですが、小泉八雲の「雪女」には、妖怪の苦しみや悲しみが表現されていると思います。

小泉八雲が怪談話を通して、読者に伝えたいことは何でしょうか。

怪談話とは、普通、人々を怖がらせるだけのものが多いと思います。しかし、小泉八雲の怪談話は、亡霊や妖怪の感情が表現されているため、読者の興味を引きつける魅力がある

のだと思います。
そして、きっと小泉八雲は亡霊や妖怪が人間を恐怖に陥れる存在ではなく、人間と変わらない存在であるということを伝えたかったのではないかと思います。
亡霊や妖怪の立場に立ち、怪談をつくることができるのは、小泉八雲が優しい心の持ち主であるからです。
小泉八雲は、自らの死を恐れていなかったそうです。それは、死によって人間の本質が変わることはないと考えていたのかもしれません。
日本人は、昔から先祖の霊を敬い、お盆や彼岸によくお墓参りをしたり、位はいを大切にしたりしてきました。小泉八雲は、先祖だけではなく、すべての霊に親しみに近い感情を

抱いていたのかもしれません。だから、小泉八雲の怪談話に登場する亡霊や妖怪は、ただ怖いだけの存在ではなく、どことなく人間のような存在感を感じさせます。そこが、小泉八雲の怪談のおもしろさであり、その作品が多くの日本人に愛される理由なのでしょう。

小泉八雲の怪談話で描かれている人情や愛は、日本人の良さであり、大切にしたい心です。

近代化した日本では、忙しいあまり他人のことを思いやる心を忘れがちになってしまいます。だから読者は、小泉八雲の作品を読んだ時、懐かしさに似た感情を抱くのかもしれません。

小泉八雲の怪談話は、数多くの作品があり、まだ私の知ら

ないものもたくさんあります。私は、それらを読むことにより、もっと八雲の目で見た日本を知りたくなりました。

外国人でありながら日本人と結婚し、生涯を日本で終えた小泉八雲は、焼津の町もとても好きだったそうです。そこには、荒々しい焼津の海や、心をいやす神社があり、また山口乙吉のような気さくな焼津の人々がいたからなのでしょう。焼津は小泉八雲にとって、心の故郷だったにちがいありません。

現在の焼津は、小泉八雲が住んでいた頃とは、景色も町並も変わってしまいましたが、焼津の文化や伝統は変わりなく引き継いでいかなければならないと思います。焼津で生まれ育った私も、この故郷や日本人の心を大切にしていきたいと

思います。